『東京大学言語学論集』34 (2013.9) 1-23

粵語・桂南平話の共通祖語の韻母[1]

濱田武志

キーワード： 粵語　桂南平話　系統関係　再建　韻母

要旨

粵語と桂南平話の共通祖語の韻母は、介音の音長が主母音よりも長い韻母である「長介音韻母」、及び、硬口蓋子音の韻尾*-ɲ/c を有している。また、祖語の再建を通じて、粵語四邑片がそれ以外の粵語及び桂南平話に対して系統上遠い関係にある可能性がある事が明らかになった。

1．緒言——系統関係と方言分類の問題——

粵語と桂南平話の間には、方言分類に纏わる様々な未解決問題が存在する。桂南平話は、確かに粵語の諸方言との間に音韻上一定の差異が存在するが、しかし、例えば粵語の下位グループの一つである「四邑片」と呼ばれる粵語諸方言はその他の粵語に見られない特徴を有している。四邑片は粵語の中でも最も特殊な方言の一つとされ(詹伯慧 et al.(1990: 18-19))、四邑片を非粵語が粵語化した結果として生まれた一種の「混合方言」であると見做す先行研究(甘于恩(2003))も存在する程である。

李连进(2002)は、粵語(広州方言)と平話(南寧市心墟郷)、チワン語(河池市白土郷)の漢語借用音(古層)、越南漢字音(順化仏教寺院読経音)を対照して、粵語以外の三者は多くの特徴を共有しており、粵語とは異なる起源を有するとしている。同論文が述べる、粵語と平話・チワン語の借用音・越南漢字音の韻母に関する差異は以下の通りである(通し番号は濱田による)：

1．果攝一等の主母音は、粵語では ɔ だが、桂南平話・チワン語借用音・越南漢字音では a で実現する。
2．遇攝合口一等は、粵語では ou だが、桂南平話・チワン語借用音・越南漢字音では o で実現する。
3．蟹攝開口一等は、粵語では ɔ:i だが、桂南平話・チワン語借用音・越南漢字音では a:i で実現する。
4．蟹攝合口一等は、粵語では u:i 又は øy だが、桂南平話・チワン語借用音・越南漢字音では o:i で実現する。
5．效攝開口一等と二等は、粵語ではそれぞれ ou、a:u だが、桂南平話・チワン語借用音・越南漢字音ではどちらも a:u で実現する。
6．咸攝合口三等の非組を声母に持つ韻母は、粵語では韻尾に-n/t をとるが、桂南平話・チワン語借用音・越南漢字音では-m/p を保存している。

[1] 本稿は日本学術振興会科研費 248065「梧州話系言語及びその周辺言語の通時的研究」の助成を受けたものである。

7．山攝開口一等の見組・曉組・影組を声母に持つ韻母の主母音は、粤語では ɔ だが、桂南平話・チワン語借用音・越南漢字音では a: で実現する。

8．山攝合口一等の端組を声母に持つ韻母は、粤語では y:n/t だが、桂南平話・チワン語借用音・越南漢字音ではそれぞれ un/t、u:ən/t、uan/t であり、互いに類似している。

9．宕攝開口一等と合口一・三等は、粤語ではどちらも ɔ:ŋ/k だが、桂南平話・チワン語借用音・越南漢字音ではそれぞれ a:ŋ/k、u:ŋ/k で実現している。

10．江攝は、粤語では ɔ:ŋ/k で実現するが、桂南平話・チワン語借用音・越南漢字音では a:ŋ/k で実現する。

但し、粤語や桂南平話が地域間で少なからぬ差異を有しているという事は、議論の前提として附言しておく。粤語も桂南平話もその内部は一様とは言えず、粤語的とされる特徴を持つ桂南平話も、桂南平話的特徴とされる特徴を持つ粤語も、共に存在している。粤語と桂南平話の区別を表面的言語特徴のみを以て行おうとする事の限界が、ここに端的に表れており、元来言語特徴による分類とは、基準の取り方如何によってその結果が大きく左右されざるを得ないものである。

分類というある種の主観性を持つ営みで以て言語・方言を区別する事それ自体は、決して否定されるものではない。また、当然のことながら、今日行われる漢語の分類は、現在までに知られる全ての諸方言の知識を前提としてなされたものではなく、分類が成立した後にも多くの方言が新たに報告されている。新たな方言の発見によって分類上の議論や分類そのものの議論が生ずる事自体もまた、決して不自然ではない。本稿は、分類という方法では捉えきれない言語史を探るために、方言間の系統関係を考察するという方法を取りたい。

華南の漢語諸方言が互いにどのような通時的関係で結ばれているのかについては、系統論的観点からの考察を通じて、より確実な議論が可能になる。祖語の再建、その祖語から各娘言語への音変化、その音変化を根拠とする系統関係の導出は、一つの問題として互いに密接不可分である。本稿では、華南の漢語諸方言に於ける系統の問題を考察するための出発点として、粤語・桂南平話共通祖語の韻母についてその再建の初案を提示する。

2．粤語・桂南平話共通祖語の韻母の再建

本節では、まず様態が他の方言と大きく異なっている粤語四邑片を除外して、その他の粤語・桂南平話の共通祖語について、その韻母の再建を試みる。

2．1．長介音韻母の導入

麦耘(2008)などは、現代漢語の方言に於いて、典型的な介音よりも長く調音される介音が存在する事を指摘し、「先長閉元音」という名称を与えている。このような介音を持つ韻母を、本稿では「長介音韻母」と呼ぶ事にする。漢語に於いて長介音韻母は典型的な形の韻母とは言い難いが [2]、東南アジア大陸部の言語や中国大陸南方の非漢語に於いては、長介音韻母は広く見

[2] 長介音韻母を有する現代漢語方言を報告する先行研究には、麦耘(2008)の他にも Tsuji(1980)や平田昌司 et al.(1998)などがある。これらの先行研究が取り上げる地域以外にも長介音韻母を有する方言が存在する可能性

受けられる。

また、拙論(2012a; 2012b)では梧州話型粵語方言(梧州話系言語)と呼ばれる粵語の下位グループの共通祖語である「賀江粵祖語」について、その音韻体系を示しているが、この中にも長介音韻母が含まれている。賀江粵祖語は長介音韻母として、*ɪːə(果攝開口三等・假攝開口三等)、*ɪːəŋ/k(宕攝開口三等(声母が庄組の場合を除く))を持ち、介音*-ɪː-は主母音*-ə-よりも長く調音されていたと考えられる。*ɪːə、*ɪːəŋ/k に対して、韻母*i̯əu(流攝開口三等)、*i̯əm/p(深攝開口三等)、*i̯ən/t(臻攝開口三等)の五つは、介音が短く発音された[i̯e-]のような実現形が推定される。「韻尾の別で主母音の音価が左右される」という、広州方言等にも見られる現象と並行する形で、韻尾に-ŋ/k を持つ場合とそれ以外とで介音・主母音の音価が相違しているのである。

東南アジア大陸部の言語や中国大陸南方の非漢語とは異なり、賀江粵祖語は長介音韻母にゼロ韻尾か軟口蓋子音しかとる事がないが、より古い、粵語及び桂南平話の共通祖語の段階では、更に多くの長介音韻母が存在していたと考えられる。広州方言など圧倒的大多数の粵語・桂南平話に於いて主母音が狭母音で実現している、效攝開口三四等、咸攝開口三四等、山攝開口三四等、山攝合口一等、山攝合口三四等は、粵語四邑片では「介音＋主母音」の形で実現しているが、それぞれに*ɪːəu、*ɪːəm/p、*ɪːən/t、*ʊːən/t、*ʏːən/t という再建形を与える事で、より合理的な言語史を再構築する事が可能となる。比較言語学的手法を以て粵祖語(Proto-Yue)の再建を試みた McCoy(1966)や Tsuji(1980)もまた、粵語四邑片の実現形を根拠としてこれらの諸韻に介音を持つ韻母を再建しているが、本稿はより長くより若干開口度の広い介音を再建する。

このように、祖語の段階に於いて、長介音韻母はゼロ韻尾(果・假攝開口三等*ɪːə)や*-ŋ/k(宕攝開口三等*ɪːəŋ/k)のみではなく様々な韻尾を取り、また、*ʊː、*ʏːといった円唇母音が長介音韻母の介音として実現していたと考える事で、広州方言では長介音韻母が単母音化したのに対して、粵語四邑片では介音が短母音化した一方で*ə が主母音として残存し広母音化した、という言語史を復元する事が出来るのである。

粵語・桂南平話共通祖語に長介音韻母が存在していた事は、以下に示すように、四邑片の分布域から遠く隔たったチワン語の漢語借用音からも傍証される。

2．2．漢語外からの手掛かり——チワン語の漢語借用音——

粵語・桂南平話のより古い段階に於いて長介音韻母が存在した事を証明する手掛かりとして、非漢語に借用された漢語の実現形が挙げられる。華南は所謂「百越」の地の一角として、古来より多種多様の非漢語が話されてきた地域であり、それと同時に、古くから漢語との接触を繰り返した地域でもある。現在華南に分布する非漢語は、様々な時代層の漢語から借用語を受容しており、漢語史の変遷を追う手掛かりを提供する。但し、各層同士の新旧を定めたり、当該の語が帰属する層を同定したりするのが難しい場合も少なくない。

粵語・桂南平話の現在の分布域と重なる地域に古くから広く分布し続けてきた非漢語の一つとして、チワン語が挙げられる。中華人民共和国の言語政策によって「チワン語」という名称

は十分あるが、少なくとも、これらの先行研究のように、介音が主母音よりも長い形で調音されるという言語事実を積極的に報告する研究自体は、多いとは言えない。

で以て纏められている諸言語・諸方言は、多様な言語変種を含んでいる事が既に知られており、地点間の相違は極めて大きい[3]。

チワン語は、明清代に接触が始まった西南官話や粤語広府片の他に、更に古い時代の漢語からも借用語を取り入れている。新しい時代層の借用語は、各地の方言がそれぞれの音韻体系にそぐうように個々別々に取り入れられたため、地点間の対応がしばしば乱れるが、しかし古い時代層に属する漢語借用音は、対応関係が整然としている(韦庆稳 et al.(1980: 12-20))。张均如 et al. (1999: 247-28))によれば、西南官話や粤語広府片と接触するよりも古い時代の層の借用語は、主に唐宋代の漢語に由来するとされ、そして、各方言間で古い時代層の漢語借用語が互いに対応している事から、当該の時代に各方言が接触した漢語は、内部の差異の小さい同一種類のものであったとされる。そして、その漢語とは現在の桂南平話に繋がる「古平話」として位置づける事が出来るものであり、桂南平話の漢字音とチワン語内の漢語借用音とが対応関係にある事からも、桂南平話とチワン語との間の深い関係は説明されるという(ibid. 249-251)。

チワン語の多くの方言(特に北部方言)は長介音韻母を有しており、漢語借用音の中には、長介音韻母で実現するものも存在する。张均如 et al.(1999)の示す、西南官話・粤語広府片以前の段階の漢語借用音に見られるチワン語武鳴方言の長介音韻母は以下の通り(但し、例外的対応を示す漢語借用音も少なくない)：

表１．長介音韻母で実現するチワン語武鳴方言の漢語借用音

漢語借用音	中古音
i:əu	效攝開口三・四等
i:əm/p	咸攝開口三・四等
i:ən/t	山攝開口三・四等
i:əŋ/k	宕攝開口三等
u:ən/t	山攝開口一等
u:əŋ/k	宕攝合口一・三等
i:ən/t	山攝合口三・四等
o:i	蟹攝合口一等

チワン語武鳴に存在する長介音韻母のうち、u:əi 以外の全てが漢語借用音の中に現れており、u:əi が現れる事が期待される蟹攝合口一等は、一般的な長母音を主母音として持つ韻母 o:i で実現している。もしも借用語をチワン語が取り入れた漢語方言に於いて u:əi が存在しないとすると、当該漢語方言には介音-i-と-u-との間に存在する一種の不均衡が、共起する韻尾について存在する(即ち、長介音韻母 i:əC(C は韻尾(coda))に於いて C は半母音-u があり得るのに対して、u:əC には半母音-i が立たない) 事になる。韻母 u:əC に韻尾-i が立たない理由は、チワン語が既に u:əi という韻母を有している以上、チワン語に借用語を供給した漢語自身に、介音に円唇母音を取り、韻尾に-i を取る音節それ自体が存在しなかったと見做さざるを得ない。

[3] Li(1977)は、タイ系言語を Northern Tai、Central Tai、Southwestern Tai に三分類し、チワン語は Northern Tai に属する方言と Central Tai に属する方言を含んでいるとしている。また、Pittayaporn(2009)によれば、タイ祖語(Proto-Tai)に遡る 11 のグループのうち、9 つがチワン語方言を含んでいる。

問題は、粤語と桂南平話の共通祖語に於いても長介音韻母 ʊ:əi が存在しなかったのか、という事である。先に引用した李连进(2002)の述べる平話・チワン語の漢語借用音・越南漢字音と粤語とを分ける特徴４は、蟹攝合口一等について前者が o:i、後者が øy 及び u:i で実現するとしているが、しかし、先行研究の報告するデータを見る限りでは、粤語または桂南平話と分類されている広西の漢語の中で、蟹攝合口一等が o:i という形で出る地点として、陈海伦 et al.(2009)は南寧市石埠鎮、百色市那畢鄉、扶綏県新寧鎮城廂社区のデータを、谢建猷(2007)は崇左市(四排話)、南寧市沙井鎮、扶綏県龍頭鄉、百色市那畢鄉のデータを、覃世贞(2007)は田東県平馬鎮のデータを、梁伟华(2007; 2009)は崇左市江州区新和鎮のデータを、李连进 et al.(2009)は崇左市江州区瀨湍鎮のデータを、それぞれ報告している。これらは何れも、南寧市に流れる河川である左江及び右江の主流が貫流する、ベトナム国境に程近い地点であり、その他の地域では主に ui や øy といった形で実現している。チワン語の漢語借用音や越南漢字音で蟹攝合口一等が o:i で現れるという事実は、粤語・桂南平話の古形を留めたものとして考えるよりは、むしろチワン語やベトナム語がどのように漢語から借用語を受容したのかという事についての手掛かりの一つとして受け止められる性質のものである。チワン語に借用語を提供した漢語方言に於ける o:i は*ʊ:əi から変化したものと考えるのが妥当である。

また、山攝合口三・四等については、iən、un、ɯ:n、wi:n など、方言間で様々な実現形を取っており(张均如 et al.(1999: 270-271))、対応関係が不鮮明である。これは、チワン語には一般に存在しない母音である y または y に近い母音を含む韻母を、各方言間で異なる方策を以て音韻体系にそぐわせようとした結果として理解出来る。チワン語に借用語を供給した漢語に於いて、山攝合口三・四等は*y:ən/t という形の長介音韻母という形をとっていたと考えられる。

果攝開口三等・假攝開口三等、果攝合口一等は、以下のような対応関係がチワン語及び漢語に於いて見られる(チワン語武鳴方言は韻母として i:ə、u:ə を有していないが(张均如 et al.(1999: 50-55))、一方チワン語田東方言は i:ə、u:ə を有している(ibid. 62-65))。チワン語方言間の韻母の対応については未解明の点も多いが、少なくとも下の対応を見る限りに於いて、チワン語は*ɪ:ə(果攝開口三等・假攝開口三等)の長介音要素を反映した実現形を有していると考えられる。果攝合口一等は、果攝開口三等と同様に長介音要素を有した*ʊ:ə を再建出来ると考えられるが、この事はチワン語との対照を通じては確認し難い。果攝合口一等に*ʊ:ə を再建する事の妥当性については、遇攝との比較の中で改めて論ずる：

表２．果攝合口一等、果攝開口三等、假攝開口三等の実現形

	チワン語(武鳴)(张均如 et al.(1999))	チワン語(田東)(张均如 et al.(1999)	桂南平話(田東)(覃世贞(2007))	粤語(広州)
鎖(果攝合口一等)	θu	ła	łu	sɔ
過(果攝合口一等)	kʷa	kʷa	ku	kʷɔ
瓜(假攝合	kʷa; kʷe	kʷa	kʷa	kʷa

口二等)				
歌(果攝開口一等)	ka; ko	ko	kɔ	kɔ
茄(果攝開口三等)	kɯ	kia	ki	k^hɛ
車(假攝開口三等)	ɕi	ɕia	$tɕ^h$ɛ	$tɕ^h$ɛ

なお、果攝合口三等については、属する字自体が少なく、且つ、その字も常用性が低い事から、再建形を決定しがたい。但し、他の攝との対応関係から考えれば、*ʏːə という形が理論上再建可能である。

２．３．梗攝の韻尾——硬口蓋韻尾*-ɲ/c の導入——

桂南平話として分類される諸方言の間に様々な差異が存在する事は前述の通りであるが、粵語・桂南平話のより古い段階の姿を明らかにするにあたり——粵語・桂南平話の内部の系統を論ずるにあたり——重要な情報を担っているのが、中古音の宕攝、江攝、曾攝、梗攝に対応する音である。

２．３．１．梗攝開口二等、梗攝合口二等、宕攝開口一等、宕攝開口三等、江攝開口二等

覃远雄(2001)は 9 地点の桂南平話(但し、融水方言および宜州方言は、李连进(2000)で桂北平話に分類されている)について、宕攝開口一等、宕攝開口三等、江攝開口二等の合流状況を基に、以下のように分類を行っている：

１．宕攝開口一等と江攝開口二等が同音。宕攝開口三等のみ異なる。
　心墟、田東、邕寧、亭子

２．宕攝開口一等、宕攝開口三等、江攝開口二等、何れも互いに異なる音。
　横県、賓陽(、融水、宜州)

３．江攝開口二等と宕攝開口三等が同音で、宕攝開口一等のみ異なる。
　貴港

宕攝開口一等と江攝開口二等、及び宕攝開口三等、梗攝開口二等の四者を比べ、その合流状況を俯瞰すると、宕攝開口一等と江攝開口二等は多くの方言では対立がないが、賓陽方言(李连进(2000)、黄英富(2007)、谢建猷(2007)、陈海伦 et al.(2009))や玉林方言(李连进(2000)、梁忠东(2010))など、一部の粵語・桂南平話では両者が対立しており、また、宕攝開口三等と梗攝開口二等が合流する方言は桂南平話を中心に見受けられる(表３～５．を参照)。宕攝開口一等・宕攝開口三等が合流している方言は陈小燕(2007)の一部方言、谢建猷(2007)の鐘山県の方言などに限られており(拙論(2012a; 2012b)の述べる、梧州話型粵語方言の西部グループ所属の諸方言)、また、宕攝開口一等が梗攝開口二等と合流しながら江攝開口二等と合流していないという方言は、管見の限りでは存在しない。

また、江攝開口二等・梗攝開口二等が合流している方言には、貴港市(谢建猷(2007)、陈海伦

et al.(2009))、貴港市港北区港城鎮(陈晓锦 et al. (2010))、貴港市港南区東津鎮(ibid.)、霊山県(黄昭艳(2006))、横県(黄海瑶(2008))、浦北県(谢建猷(2007))が挙げられるが、このうち、宕攝開口一等・江攝開口二等・梗攝開口二等が合流しているのは、霊山県・横県・浦北県の三方言のみである(但し、李连进(2000)の示す横県方言は、宕攝開口一等・江攝開口二等のみが合流)。

表３．桂南平話(李连进(2000))11 地点の宕開一、宕開三、江開二、梗開二、梗開三

地点	缸(宕攝開口一等)	姜(宕攝開口三等見母)	陽(宕攝開口三等以母)	江(江攝開口二等)	耕(梗攝開口二等)	京(梗攝開口三等)
馬山	kaŋ	kɛŋ	(j)iɐŋ	kaŋ	kɛŋ	kən
田東	kaŋ	kɛŋ	(j)iɐŋ	kaŋ	kɛŋ	kən
百色	kʌŋ	kɛŋ	jəŋ	kʌŋ	kɛŋ	kə:n
富寧	kaŋ	kɛŋ	(j)iɐŋ	kaŋ	kɛŋ	kɯn
南寧	kaŋ	kɛŋ	(j)iɛŋ	kaŋ	kɛŋ	kɐŋ
龍州	kaŋ	kɛŋ	jɐŋ	kaŋ	kɐŋ	kɐn
扶綏	kaŋ	kɛŋ	(j)iɐŋ	kaŋ	ɛŋ	keŋ
横県	kɔŋ	kɛŋ	hɛŋ	kɔŋ	kəŋ[4]	kɐŋ
賓陽	køŋ	kɛŋ	(j)iɛŋ	tsaŋ	kɛŋ	kɐŋ
玉林	kɔŋ	ka	(j)ia	kɐŋ	ka	keŋ
藤県	kɔŋ	kɛŋ	iɛŋ	kɔŋ	keŋ	keŋ

表４．粤語(詹伯慧 et al.(1998))粤西 10 地点の宕開一、宕開三、江開二、梗開二、梗開三

地点	缸(宕攝開口一等)	姜(宕攝開口三等見母)	陽(宕攝開口三等以母)	江(江攝開口二等)	耕(梗攝開口二等)	京(梗攝開口三等)
肇慶	kɔŋ	kœŋ	(j)iœŋ	kɔŋ	kɐŋ	keŋ
四会	kɔŋ	kyɔŋ	(j)yɔŋ	kɔŋ	kaŋ	kiɐŋ
広寧	kɵŋ	kyɵŋ	(j)yɵŋ	kɵŋ	kaŋ	kiɐŋ
徳慶	kɔ・kɔŋ	ke・keŋ	ie・ieŋ	kɔ・kɔŋ	kɐŋ	keŋ
懐集	kɔŋ	kœŋ	(j)iœŋ	kɔŋ	kɛŋ	kɛŋ
封開	kœŋ	kiuŋ	iuŋ	kœŋ	keŋ	kiŋ
雲浮	kɔŋ	kœŋ	(j)iœŋ	kɔŋ	kaŋ	keŋ
新興	kɔŋ	kiaŋ	(j)iaŋ	kɔŋ	kaŋ	kɐn
羅定	kɔŋ	kœŋ	iœŋ	kɔŋ	kɐŋ	keŋ

[4] 李连进(2000)の横県に於いて、梗攝開口二等(舒声)は aŋ と əŋ を実現形として有する。前者は白読音、後者は文読音と考えられる。

郁南	kɔŋ	keŋ	ieŋ	kɔŋ	kaŋ	kɤŋ

表５．粤語・桂南平話(谢建猷(2007))10 地点の宕開一、宕開三、江開二、梗開二、梗開三

地点	缸(宕攝開口一等)	姜(宕攝開口三等見母)	陽(宕攝開口三等以母)	江(江攝開口二等)	耕(梗攝開口二等)	京(梗攝開口三等)
桂平	kɔŋ	køŋ	iøŋ	kɔŋ	kaŋ	kiŋ
蒙山	kuaŋ	k^{h}iəŋ	hiəŋ	kuaŋ	kiaŋ	kiŋ
武宣	kaŋ	kiaŋ	iaŋ	kaŋ	kɐŋ	kiŋ
崇左	kaŋ	kɛŋ	iɛŋ	kaŋ	kɛŋ	kiŋ
貴港	køŋ	kiəŋ	iəŋ	kiaŋ	kiaŋ	kiŋ
北流	kuaŋ	kiaŋ	iaŋ	kuaŋ	kiaŋ	kiŋ
百色	kɔŋ	køŋ	iøŋ	kɔŋ	kaŋ	kiŋ
博白	kɔŋ	kiaŋ	iaŋ	kiaŋ	kan	kiŋ
靈山	kaŋ	kiɛŋ	iɛŋ	kaŋ	kiɛŋ	kiŋ
浦北	kɛŋ	kəŋ	iəŋ	kɛŋ	kɛŋ	kɐi
欽州	kɔŋ	kiɛŋ	iɛŋ	kɔŋ	kan	kiŋ
北海	kɔŋ	kiɛŋ	iɛŋ	kɔŋ	kan	kiŋ
寧明	kɔŋ	køŋ	iøŋ	kɔŋ	kaŋ	kiŋ
南寧(粤)	kɔŋ	køŋ	iøŋ	kɔŋ	kaŋ	kiŋ
南寧(平)	kaŋ	kɛŋ	iɐŋ	kaŋ	kɛŋ	kiŋ
扶綏	kaŋ	kiəŋ	iaŋ	kaŋ	kiəŋ	kiŋ
百色	kaŋ	kɛŋ	iaŋ	kaŋ	kɛŋ	kən
賓陽	kœŋ	kɛŋ	iɛŋ	ʃaŋ	kaŋ	kəŋ
横県	kɔŋ	kiɛŋ	hiɛŋ	kɔŋ	kaŋ	kiŋ
信都	kɤ̃	kɔ̃	ɔ̃	kɤ̃	kɛ̃	kĩ
鐘山[5]	kiaŋ	kiaŋ	iaŋ	kiaŋ	kaŋ	kɛ̃

梗攝開口二等は、主母音が a や ɐ か、或いは ɛ などの前舌母音のどちらかで実現している。これを踏まえて、韻尾に硬口蓋子音を立てた*aɲ/c という音形を再建したい。詹伯慧 et al.(1998)の示す雲浮県の粤語方言は、山攝開口二等と梗攝開口二等が合流して aŋ/k という音価で実現し

[5] 鐘山県の方言は谢建猷(2007)で「土話」とされるが、非粤語との言語接触の結果音韻体系の様相を大きく変化させた粤語の一種と考えられる(拙論(2012a; 2012b))。

ているが、韻尾の調音点はɲ/c とŋ/k の中間に位置するとされており(詹伯慧 et al.(1998: 28-31))、梗攝開口二等の韻尾が嘗て硬口蓋子音であった事を傍証している。

宕攝開口三等がチワン語武鳴方言の借用音に於いて長介音韻母で実現している事は先述の通りであり、宕攝開口三等には*ɪːəŋ/k が再建出来る。*ɪːəŋ/k もまた*ɪːəm/p や*ɪːən/t と同様に、音価こそ異なれど、多くの方言で(*ɪːəm/p や*ɪːən/t よりは少ない数の方言で)単母音化の道を辿ったという事が出来る。

賓陽県の諸方言に注目すると、江攝開口二等の見母が破擦音化を起こしている事に気が付く。賓陽県の諸方言は假攝・蟹攝・效攝・咸攝・山攝の開口二等に於いて見母・疑母の口蓋化が発生しているが、この現象は、「ø>j／____a」という音変化の結果として生じた嘗ての半母音が、声母にその痕跡をとどめたものと考えられる。江攝開口二等も同様に主母音に*a を持っていたと考えられ、*aŋ/k が再建される。一方、梗攝開口二等では口蓋化が発生していないが、これは半母音 j と調音点を同じくする子音(即ちɲ/c)が韻尾として存在していた事を傍証している。この現象は、越南漢字音に於いて見母が、開口二等韻のうち耕韻・庚韻でのみ口蓋化を起こさなかった事と正しく並行している(三根谷(1993: 318-322))。

残りの宕攝開口一等には、*ɔŋ/k を再建するのが妥当である。江攝開口二等が方言によって宕攝開口一等または梗攝開口二等と合流するにもかかわらず、宕攝開口一等が江攝開口二等を差し置いて梗攝開口二等と合流する方言が存在しないのも、江攝開口二等が宕攝開口一等とは韻尾が、梗攝開口二等とは主母音が、それぞれ共通していた一方で、宕攝開口一等と梗粤開口二等は音形上かけ離れていたためである、と説明できる。

また、宕攝開口三等は粤語・桂南平話に於いて通方言的に声母が莊組か否かで実現形が分裂しているが、横県・靈山県の方言では、莊組を声母に持つ宕攝開口三等字が宕攝開口一等と異なる実現形を有している(黄昭艶(2006)、黄海瑶(2008))[6]。四邑片を含め、粤語や桂南平話全体を見渡しても、管見の限りでは莊組の宕攝開口三等が宕攝開口一等と異なる形を取る方言は、管見の限りでは横県・靈山県の方言を措いて他に存在しない。

一見不可解なこの現象は、宕攝合口一三等が共起し得る声母について着目する事で解決される。宕攝合口一三等は非組か牙喉音としか共起しない。しかし、莊組はそのどちらでもない。「横県・靈山県以外の方言では*ʊːəŋ/k>ɔŋ/k という音変化が、非組・牙喉音以外の声母を有する時に発生したが、横県・靈山県の方言ではこの変化が起こらなかった」と考える事が出来る。McCoy(1966)や Tsuji(1980)では宕攝開口一等と同一の再建形を莊組の宕攝開口三等に与えているが、本稿では、莊組の宕攝開口三等に宕攝合口一等と同一の音形である*uːəŋ/k を再建したい。

２．３．２．梗攝開口三・四等、曾攝

梗攝開口三・四等は、多くの方言で曾攝開口三等と合流を起こしている。広州方言でも、曾攝開口三等は ŋ/k で実現するが、梗攝開口三・四等は文語層で ŋ/k、口語層で ɛːŋ/k と、口語層でのみ対立を保存している。広州方言の口語層で梗攝開口三・四等の主母音が長母音 ɛː で実現

[6] 但し、李连进(2000)の報告する横県横州方言では、宕攝開口一等と莊組の宕攝開口三等とが同一の実現形を有している。

している事などを踏まえるに、梗攝開口三・四等には長介音韻母*ɪːəC を再建するのが適当と考えられ、韻尾に硬口蓋子音を取る*ɪːəɲ/c という形が得られる。詹伯慧 et al.(1998)の示す四会、広寧、封開(入声のみ)の三地点は、この介音要素を反映したと見られる実現形を有している。

曾攝開口一等は多くの地点に於いて韻尾が-ŋ で実現しており、主母音も ɐ で実現する事が多い。曾攝開口一等は、軟口蓋子音を韻尾として有する*ɐŋ/k を再建するのが適当と考えられる。

曾攝開口三等は、*iɲ/c、または主母音に ə を取った*i̯əɲ/c が再建形の候補として考えられる。しかし、見母・群母の破擦音化が流攝・深攝・臻攝で起こる方言が複数存在する一方で、内転である止攝・曾攝開口三等で見母・群母の口蓋音化・破擦音化が起きる方言は、管見の限りでは存在しない(但し、曾攝開口三等に於いて見母・群母を取る字は、「極」を除いて、常用性が低い)。これを踏まえるに、曾攝開口三等は流攝・深攝・臻攝のような、軟口蓋破裂音を口蓋音化させる半母音要素-i̯-を持った*i̯əC のような形を、粤語・桂南平話の共通祖語の段階に於いて取っていなかったと考えざるを得ず、従って、曾攝開口三等の再建形としては*iɲ/c が最も妥当という事になる。

梗攝合口三・四等については各方言とも、長介音韻母に遡る事を示唆する実現形を取る例が無く、*(u̯)iɲ/c が再建形として妥当であろうと考えられる[7]。曾攝合口一等、曾攝合口三等についても、それぞれ*(u̯)ɐŋ/k、*(u̯)iɲ/c を理論上再建出来ると考えられるが、特に曾攝合口一等は元々少ない例の中に複数の実現形が見られる事にも注意を要し、*(u̯)ɐŋ/c という古形に遡る形態素が存在しないという可能性も考慮に入れる必要がある。詳細な議論は稿を改めて行いたい。

また、曾攝開口三等も遇攝合口三等や宕攝開口三等と同様に、莊組を声母に持つ場合に韻母の形式が異なる。言語調査の中で得られるのは(つまり、韻書を紐解かねば見つけられないような常用性の極めて低い字を除いては)「側」「測」「色」「嗇」の四字くらいであり、何れも入声韻であるが、これらの字は曾攝開口一等と同様の実現形を取る場合が多い。莊字の曾攝開口三等には曾攝開口一等と同じ*ɐk を再建するのが妥当である。

２．４．その他

２．４．１．假攝開口二等、假攝合口二等、果攝開口一等

假攝開口二等は、大多数の方言の実現形に従って、*a が再建される。假攝合口二等も同様に、*(u̯)a が再建形として得られる。

果攝開口一等は、通方言的に主に ɔ で実現する。一部の桂南平話では口語的な形態素の字音に於いて韻母が a で実現しており、この現象は、果攝の古形の残存として先行研究では捉えられている(覃远雄(2011)。なお、平山(1967)の果攝開口一等の推定音は*ɑ)。ただ、a という韻母は假攝開口二等と形を同じくするものであり、「一部の桂南平話に於いて、口語的形態素に限って果攝開口一等が　假攝開口二等と合流を起こしている」と解釈する事も可能である。果攝開口一等と假攝開口二等が完全に合流している粤語・桂南平話は管見の限りでは存在しないが、粤語に於いて主母音 ɔ と a の違いで対立している韻母(例：広州方言 ɔi・ai、ɔn・an など)が、桂南

[7] 半母音*u̯は*ʊːとは異なり短く発音され、牙喉音声母とのみ共起すると考えられる。以下*(u̯)で表す介音は全て、牙喉音声母とのみ共起し、それ以外の声母が立つ場合には脱落する。

平話の複数の方言に於いて対立を失って主母音 a で実現しており、口語的(即ち常用性の高い)形態素(字)に限って ɔ>a／____#という音変化が発生した、と考えた方が、果攝開口一等の a を古形の残存と見做すよりも自然な解釈であるように考えられる。本稿では、果攝開口一等に*ɔ を再建する。

２．４．３．宕攝合口一三等、通攝合口一等、通攝合口三等

宕攝合口一三等の主母音が通攝の主母音よりも狭く実現するという現象が、多くの桂南平話に見られる。中古音の再建音価を基に考えても、宕攝合口一三等の方が通攝よりも広い主母音で実現している方が一見自然である。事実、大多数の粤語方言や一部の桂南平話ではこれと反対に、宕攝合口一三等の主母音は主に ɔ で、通攝は主に u で、それぞれ実現しており、恰も宕攝と通攝が「逆転」しているかのように見える。

この音変化は、宕攝合口一三等が主母音の狭母音化を起こしたと考える事で合理的に説明を行う事が出来る。即ち、宕攝合口一三等が uŋ に変化し、一方、元々主母音に狭母音を有していた通攝が主母音を広くした、という chain shift を想定する事で、桂南平話に見られる「逆転」が説明されるのでる。

先述した宕攝合口一三等の再建音か*ʊ:əŋ/k は、この音変化を説明するのに適している。即ち、宕攝合口一三等が狭母音で実現する諸方言に於いては、通攝の主母音の開口度が広くなると共に、宕攝の介音*ʊ:-が主母音化して*ə が脱落したのに対して、宕攝合口一三等が比較的広い主母音(ɔ など)で実現する諸方言に於いては、介音*ʊ:が半母音化と短母音化を起こして*ə が名実ともに主母音となった(そして、通攝の主母音は狭母音のまま不変)、という音韻史を想定する事が可能となるのである。

また、通攝合口一等と通攝合口三等は殆どの方言に於いて合流しているが、わずかな例外として黄群(2006)や陈小燕(2007; 2009)の報告する広西賀州市八歩区の本地話を挙げられる。賀州市八歩区の本地話では、通攝合口三等は声母が牙喉音の一部の字に限って yŋ/k 乃至 iuŋ/k で実現しており、通攝合口一等と対立を保存している(例：huŋ1「空(天～)」hiuŋ1「胸」)。通攝合口三等には*uŋ 及び*yŋ を再建できる。

２．４．２．果攝合口一等、遇攝

遇攝合口一等については、多くの桂南平話に於いて o 乃至 ɔ で実現している事実を受けて、先行研究ではこれらの音価を、中古音の段階の実現形を保存したものと見做している(覃远雄(2012))。この考えに従うならば、粤語・桂南平話の共通祖語に於いて遇攝合口一等は*o 乃至*ɔ であったとせねばならない。しかし本稿では、粤語・桂南平話の共通祖語に於いて遇攝合口一等は*o 乃至*ɔ ではなく、*u と再建するのが妥当であると考える。

もし假に遇攝合口一等に非狭母音を再建すると、共通祖語の音韻体系に於いては主母音*u は、韻尾*-i や*-n/t、*-ŋ/k を取るにも関わらず、*u それ自体が単母音としては非組の声母と共起する場合にしか存在しない事になってしまう。遇攝合口一等が o 乃至 ɔ で実現する桂南平話に於いては果攝合口一等が u で実現しているが、共通祖語の段階でも果攝合口一等が*u であったと

考える根拠は、現代の諸方言にも中古音にも見出し難い。

或いは、「祖語に於いて魚韻と虞韻の対立が保存されており、虞韻が*u で、魚韻が*y 乃至それに類する音価で、それぞれ実現していた」という仮説も考えられるが、しかし現代の諸方言からは、魚韻・虞韻の対立がかつて存在していた証拠を見出す事が出来ない。仮に現代の粤語・桂南平話の諸方言が遡り得る漢語に於いて、魚韻・虞韻の対立が保存されていたとしても、それは粤語・桂南平話の共通祖語よりも古い時代に於いてであり、比較言語学的方法に基づく祖語再建という営みに於いては、魚韻・虞韻の既に合流した音韻体系を祖語として再建する他ない。

従って、遇攝合口一等が o 乃至 ɔ で実現する桂南方言は、*o (中古音に近い段階)＞*u (粤語・桂南平話の共通祖語)＞o という、一見不自然な変化を経ている事になる。しかし、ここで先述の宕攝合口と通攝の議論と並行する形で果攝合口と遇攝の音変化を想定する事で、同様に合理的説明が可能となる。即ち、果攝合口一等の狭母音化に伴って遇攝合口一等が*u からより広い母音へと変化したという chain shift が此処に想定される。宕攝合口一三等と同様に果攝合口一等も、介音が円唇性を帯びた長介音韻母を有していた、即ち*ʊ:ə と再建されるとすると、果攝合口一等で生じた*ʊ:ə＞u という音変化と、遇攝の*u＞o, ɔ という音変化とが起こった、と説明出来るのである。

遇攝合口三等は、唇音(非組)に於いては遇攝合口一等と同様の実現形を取り、莊組に於いては果攝合口一等と同様の実現形を取るため、それぞれ*u、*ʊ:ə を再建形として与えられる。そして、それ以外の声母と共起する場合は、専ら*y が再建される。

２．４．３．蟹攝、止攝

蟹攝開口一等は ɔi で実現する方言が粤語を中心として数多く存在する。但し、声母が幫組の場合は蟹攝合口一等と同様の実現形を取る。再建形としては*ʊ:əi (幫組)、*ɔi (その他)が妥当である。

蟹攝開口二等及び蟹攝合口二等は、多くの方言の実現形に従ってそれぞれ*ai、*(u̯)ai が再建される。

蟹攝開口三四等は、ɐi や əi の形で実現する方言が多い。流攝開口三等や深攝開口三等、臻攝開口三等とは違い、見母や群母の破擦音化が観察されない事から、介音要素を再建する事は出来ない。*ɐi を再建するのが妥当である。

止攝開口三等は、個別の例外も少なくないが、i または ɨ が二重母音化した ei 乃至 əi で実現する。再建形としては*i が適当である。

多くの方言で止攝合口三等と蟹攝合口三四等は、声母が非組の場合、音韻的対立を保存しているが(例：広州方言 fɐi「廢」fei「飛」)、それ以外の場合に於いては同一の実現形を取る。しかし、賓陽県の桂南平話では、声母が牙喉音の場合に於いても両者の対立が保存されている(例えば、賓陽県王霊鎮の方言では kwɐi「閨」kwəi「龜」であるが(陈海伦 et al.(2009))、広州方言では共に kwɐi)。声母が非組の場合は、蟹攝合口三四等は*ɐi、止攝合口三等は*i が、声母が牙喉音の場合は、蟹攝合口三四等は*(u̯)ɐi、止攝合口三等は*(u̯)əi が、それ以外の声母を伴う場合は、

蟹攝合口三等・止攝合口三等は共に*ui が、それぞれ再建される。

2．4．4．效攝開口一等、效攝開口二等、流攝

效攝開口一等は、広州方言などでは遇攝合口一等と同じ形で実現しているが、広西賓陽県の桂南平話では、賓陽県黎塘鎮(陈海伦 et al.(2009))や横県(黄海瑶(2008))、靈山県(谢建猷(2007))、広東省懐集県(詹伯慧 et al. (1998))では ɔu で、賓陽県王靈鎮(陈海伦 et al.(2009))や同県新橋鎮(ibid.)、同県大橋鎮(黄英富(2007))では øu で、賓陽県蘆墟鎮(李连进(2000))では εu で実現するなど、遇攝合口一等との対立を保存しており、*ɔu という形を再建するのが妥当である。

また、效攝開口二等は、大多数の諸方言と同様の形*au が再建される。

流攝開口一等と流攝開口三等は広州方言など多くの方言で同一の実現形を取るが、梧州話型粤語方言をはじめとする複数の方言で、見母や群母が流攝開口三等で破擦音化する現象が観察される。従って、祖語の段階で流攝開口一等と三等とは互いに異なる形を有していたと考えられる。広西賓陽県の桂南平話では、流攝開口一等が ɐu であるのに対し、流攝開口三等は əu であり、両者は音韻的に対立している。流攝開口一等は*ɐu を、流攝開口三等は*(i̯)əu を、それぞれ再建出来る。

2．4．5．咸攝開口一等、咸攝開口二等、深攝

咸攝開口一等は広州方言では ɐm/p という形で実現している。しかし、遠藤(1986)が述べるように、*Cantonese made easy* (Ball, Dyer(1888) 第 2 版)が記す粤語方言では声母が牙喉音の咸攝開口一等字が ɔm/p で実現しており、広府片に於いて比較的新しい時代に ɔm/p＞ɐm/p という音変化が起こった可能性が高い。現代の諸方言にも、咸攝開口一等が牙喉音を声母に持つ字に於いて ɔm (陈海伦 et al.(2009)の賓陽県黎塘鎮、黄海瑶(2008)及び谢建猷(2007)の横県、黄昭艶(2006)及び谢建猷(2007)の靈山県、陈海伦 et al.(2009)の崇左市(粤語)など)、om/p (詹伯慧 et al.(1998)の広東省羅定市、谢建猷(2007)の北流市)、øm/p(李连进(2000)の賓陽県蘆墟鎮、黄英富(2007)の賓陽県大橋鎮、陈海伦 et al.(2009)の賓陽県王靈鎮・同県新橋鎮)で実現する方言が存在する。従って、咸攝開口一等は*ɔm/p (牙喉音)、*am/p (その他)を再建する事が出来る。

咸攝開口二等は、多くの方言の実現形に従って、*am/p が再建出来る。

深攝開口三等は、流攝開口三等と同様に一部の方言で見母・群母の破擦音化が観察される。*(i̯)əm を再建するのが妥当と考えられる。

2．4．6．山攝開口一等、山攝開口二等、山攝合口二等、臻攝

山攝開口一等は牙喉音と共起する場合に ɔn/t、それ以外の場合に an/t で実現する方言が数多く存在する。*ɔn/t (牙喉音)、*an/t (その他)を再建出来よう。

山攝開口二等、山攝合口二等もまた、多くの方言の実現形に従って、*an/t、*(u̯)an/t が再建される。

臻攝開口一等及び臻攝開口三等は、流攝と同様に、多くの方言で両者が合流を起こしているが、流攝・深攝と同様、臻攝開口三等が見母・群母の破擦音化を引き起こしている方言が存在

する。広西賓陽県の諸方言の実現形は臻攝開口一等が ɐn/t、臻攝開口三等が ən/t であり(黄英富(2007)、谢建猷(2007)、陈海伦 et al.(2009))、祖形にはそれぞれ*ɐn/t、*(i̯)ən/t が再建される。

臻攝合口一等及び臻攝合口三等は、賓陽県の諸方言では両者の間に音韻的対立が存在する(ibid.)。非組を声母に持つ臻攝合口三等は主母音に ɐ を取っているが、それ以外の場合、臻攝合口一等は(u̯)ɐn/t、臻攝合口三等は(u̯)ən/t という形で、それぞれ実現している。臻攝合口三等は非組字に*ɐn/t が、それ以外には*(u̯)ən/t が、それぞれ再建される。

但し、左江・右江流域の蔗園話などの桂南平話には、ほぼ非牙喉音を声母に持つ臻攝合口一等の一部の舒声字にのみ専ら現れる韻母が存在する。粤語・桂南平話の多くの方言に於いて臻攝合口一等が山攝合口一等と同じ実現形を取るところを、例えば、ɔn (李连进(2000)、谢建猷(2007)、梁伟华(2007)、梁伟华 et al.(2009)、李连进 et al.(2009))、uan(覃世贞(2007))、on(陈海伦 et al.(2009)の南寧市石埠鎮)という韻母がこれにあたる(但し入声の場合は臻攝開口一等と同様の実現形をこれらの諸方言も取っている)。従って、これらの非牙喉音の臻攝合口一等字の祖形に山攝合口一等と同じ*ʊ:ən を再建する事は出来ない。

ここで、山攝開口一等が牙喉音とそれ以外とで*ɔn/t と*an/t に分裂している事実を踏まえるに、非牙喉音の臻攝合口一等に*ɔn を再建する方策を取る事が出来る。*ɔn を非牙喉音の臻攝合口一等に再建し、「多くの方言で、非牙喉音声母に後続する*ɔn は*ʊ:ən と合流したが、蔗園話など一部の方言では、他の韻母との合流も起こさず、牙喉音声母に後続する*ɔn とも異なる音変化を経て今日に至っている」という通時的音変化を想定する事で、蔗園話などに於ける臻攝合口一等に見られる一見特異な韻母の存在についても、説明を与える事が可能となる。

以上に述べたように、臻攝合口一等のうち、一部の非牙喉音声母の舒声字については*ɔn を再建出来る。そして、それ以外の非牙喉音声母の舒声字、入声字には*ɐn/t を、牙喉音声母を持つものには*(u̯)ɐn/t を、それぞれ再建出来る。

以上のように、粤語四邑片を除いて粤語及び桂南平話の共通祖語の韻母を再建すると、以下の音韻体系が得られる：

a	ai	au	am	an	aɲ	aŋ	ap	at	ac	ak
(u̯)a	(u̯)ai			(u̯)an	(u̯)aɲ			(u̯)at	(u̯)ac	
	ɐi	ɐu		ɐn		ɐŋ		ɐt		ɐk
	(u̯)ɐi			(u̯)ɐn		((u̯)ɐŋ)		(u̯)ɐt		((u̯)ɐk)
		(i̯)əu	(i̯)əm	(i̯)ən			(i̯)əp	(i̯)ət		
	(u̯)əi			(u̯)ən				(u̯)ət		
ɔ	ɔi	ɔu	ɔm	ɔn		ɔŋ	ɔp	ɔt		ɔk
ɪ:ə		ɪ:əu	ɪ:əm	ɪ:ən	ɪ:əɲ	ɪ:əŋ	ɪ:əp	ɪ:ət	ɪ:əc	ɪ:ək
i					iɲ				ic	
					(u̯)iɲ				(u̯)ic	
ʊ:ə	ʊ:əi			ʊ:ən		ʊ:əŋ		ʊ:ət		ʊ:ək

u	ui	uŋ		uk
(ʏ:ə)		ʏ:ən	ʏ:ət	
y		yŋ		yk

3．粵語四邑片の系統上の位置付け

McCoy(1966)及び Tsuji(1980)に於いては、粵祖語再建の最も重要な手掛かりとして、粵語四邑片のデータが位置付けられており、その結果として、先行研究の中で再建された粵祖語の音韻体系は、多くの粵語・桂南平話の諸方言のものとはその様相を大きく異にしている。

韻母に見られる四邑片の特徴としては、長介音韻母に対応する韻母が、「介音＋a(＋韻尾)」またはそれに類する形で実現している事や、流攝開口三等、深攝開口三等、臻攝開口三等、臻攝合口一・三等の主母音が狭母音 i 乃至 u で実現している事が挙げられる。即ち、前節の再建形に於ける長介音韻母が四邑片の「介音＋a(＋韻尾)」という形の韻母に、*i̯əC が四邑片の iC に、*u̯əC が uC に、それぞれ対応している。

もしも四邑片とそれ以外の粵語・桂南平話との間で共通祖語を再建するのならば、両者はその祖形からそれぞれどのような音変化を経てきたのだろうか。McCoy(1966)及び Tsuji(1980)は、本稿で示した長介音韻母、*i̯əC・*u̯əC の双方に対応するものとして、共に「介音＋主母音＋C」という韻母を再建形として与えている。しかし本稿では、*i̯əC・*u̯əC の更に古い形として四邑片の形式に近い*iC、*uC を採用する。この根拠には、韻母*iC 及び*uC の問題、そして、粵語・桂南平話の周辺諸言語との対応関係を挙げる事が出来る。

*iɲ/c は 2 節末に掲げた音韻体系内部に於いて、主母音*i が韻尾を伴った唯一の韻母であり、*i̯əC と相補分布の関係にある。*iɲ/c 及び*i̯əC が共に「主母音*i＋韻尾」という形に遡るとすると、調音点(或いは声道の最も狭窄する点)が硬口蓋である*i̯と*ɲ が共起した結果として、その間に ə が発生するという音変化の発生が阻害されたものとして理解出来る。これと並行して、*u 及び*uC は*u̯əC と相補分布の関係にある。*uŋ/k 及び*u̯əC が共に「主母音*u＋韻尾」という形に遡るとすると、*u も*-ŋ も共に軟口蓋に於いて声道が狭窄乃至閉鎖するという性質を共有しており、それ故に*u と*-ŋ の間に ə が発生するのが妨げられたと考えられる。

長介音韻母、及び*ə を主母音に持つ非長介音韻母に注目すると、2 節末に挙げた祖語と四邑片の諸方言との間には、以下のような対応関係が観察される：

表６．粵語・桂南平話の共通祖語と四邑片の基本的対応関係

四邑片を除いた粵語・桂南平話共通祖語	四邑片(台山)(詹伯慧(2002))	四邑片(開平)(詹伯慧(2002))	四邑片も含めた粵語・桂南平話共通祖語
ɪ:əu	iau	iu	ɪ:əu
ɪ:əm/p	iam/p	im	ɪ:əm/p
ɪ:ən/t	en/t	in/t	ɪ:ən/t
ɪ:əɲ/c	en/t・iaŋ/k	en/t・iaŋ/k	ɪ:əɲ/c
ɪ:əŋ/k	iaŋ/k	iaŋ/k	ɪ:əŋ/k

i̯əu	iu	ɛu	iu
i̯əm/p	im/p	ɛm/p	im/p
i̯ən/t	in/t	en/t	in/t
iɲ/c	en/t	en/t	iɲ/c
ɐu	eu	au	ɐu
ɐn/t	an/t	an/t	ɐn/t
ɐŋ/k	aŋ/k	aŋ/k	ɐŋ/k
ʊ:əi	ui・ɔi	ui	ʊ:əi
ʊ:ən/t	ɔn/t	uan/t	ʊ:ən/t
ʊ:əŋ/k	ɔŋ/k	ɔŋ/k	ʊ:əŋ/k
(u̯)əi	ui・ei	ui	ui
(u̯)ən/t	un/t	un/t	un/t
uŋ/k	øŋ/k	oŋ/k	uŋ/k
(u̯)ɐi	i・ui・ɔi	ui・ɔi	(u̯)ɐi
(u̯)ɐn/t	un/t	un/t	(u̯)ɐn/t
ʏ:ən/t	un/t・ɔn/t	in/t・uan/t	ʏ:ən/t

以上の議論を踏まえ、四邑片を含めた粤語桂南平話共通祖語の韻母を再建すると以下のようになる：

a	ai	au	am	an	aɲ	aŋ	ap	at	ac	ak
(u̯)a	(u̯)ai			(u̯)an	(u̯)aɲ			(u̯)at	(u̯)ac	
	ɐi	ɐu		ɐn		ɐŋ		ɐt		ɐk
	(u̯)ɐi			(u̯)ɐn		((u̯)ɐŋ)		(u̯)ɐt		((u̯)ɐk)
ɔ	ɔi	ɔu	ɔm	ɔn		ɔŋ	ɔp	ɔt		ɔk
ɪ:ə		ɪ:əu	ɪ:əm	ɪ:ən	ɪ:əɲ	ɪ:əŋ	ɪ:əp	ɪ:ət	ɪ:əc	ɪ:ək
i		iu	im	in	iɲ		ip	it	ic	
					(u̯)iɲ				(u̯)ic	
ʊ:ə	ʊ:əi			ʊ:ən		ʊ:əŋ		ʊ:ət		ʊ:ək
u	ui			un		uŋ		ut		uk
(ʏ:ə)				ʏ:ən				ʏ:ət		
y						yŋ				yk

四邑片を含めた祖語と中古音との間の規則的対応関係は以下の通り：

表７．四邑片を含めた粤語・桂南平話共通祖語と中古音との対照表

中古音		四邑片を含めない粤語・桂南平話の共通祖語	四邑片を含めた粤語・桂南平話の共通祖語
攝	等呼		
果	開口一等	ɔ	ɔ
果	開口三等	ɪ:ə	ɪ:ə

果	合口一等	ʊːə	ʊːə
果	合口三等	(ʏːə)	(ʏːə)
假	開口二等	a	a
假	開口三等	ɪːə	ɪːə
假	合口二等	(u̯)a	(u̯)a
遇	合口一等	u	u
遇	合口三等	u (非組) ʊːə (莊組) y (その他)	u (非組) ʊːə (莊組) y (その他)
蟹	開口一等	ʊːəi (幫組) ɔi (その他)	ʊːəi (幫組) ɔi (その他)
蟹	開口二等	ai	ai
蟹	開口三等・開口四等	ɐi	ɐi
蟹	合口一等	ʊːəi	ʊːəi
蟹	合口二等	(u̯)ai	(u̯)ai
蟹	合口三等・合口四等	(u̯)ɐi (牙喉音) ɐi (非組) ui (その他)	(u̯)ɐi (牙喉音) ɐi (非組) ui (その他)
止	開口三等	i	i
止	合口三等	(u̯)əi (牙喉音) i (非組) ui (その他)	ui (牙喉音) i (非組) ui (その他)
效	開口一等	ɔu	ɔu
效	開口二等	au	au
效	開口三等・開口四等	ɪːəu	ɪːəu
流	開口一等	ɐu	ɐu
流	開口三等	i̯əu	iu
咸	開口一等	ɔm/p (牙喉音) am/p (その他)	ɔm/p (牙喉音) am/p (その他)
咸	開口二等	am/p	am/p
咸	開口三等・開口四等	ɪːəm/p	ɪːəm/p
咸	合口三等	am/p	am/p
深	開口三等	i̯əm/p	im/p
山	開口一等	ɔn/t (牙喉音) an/t (その他)	ɔn/t (牙喉音) an/t (その他)
山	開口二等	an/t	an/t

山	開口三等・開口四等	ɪ:ən/t	ɪ:ən/t
山	合口一等	ʊ:ən/t	ʊ:ən/t
山	合口二等	(u̯)an/t	(u̯)an/t
山	合口三等・合口四等	ʏ:ən/t	ʏ:ən/t
臻	開口一等	ɐn/t	ɐn/t
臻	開口三等	i̯ən/t	in/t
臻	合口一等	ɔn・ɐt (一部の非牙喉音) (u̯)ɐn/t (その他)	ɔn・ɐt (一部の非牙喉音) (u̯)ɐn/t (その他)
臻	合口三等	ɐn/t (非組) (u̯)ən/t (その他)	ɐn/t (非組) un/t (その他)
宕	開口一等	ɔŋ/k	ɔŋ/k
宕	開口三等	ʊ:əŋ/k (莊組) ɪ:əŋ/k (その他)	ʊ:əŋ/k (莊組) ɪ:əŋ/k (その他)
宕	合口一等	ʊ:əŋ/k	ʊ:əŋ/k
宕	合口三等	ʊ:əŋ/k	ʊ:əŋ/k
江	開口二等	aŋ/k	aŋ/k
曾	開口一等	ɐŋ/k	ɐŋ/k
曾	開口三等	ɐk (莊組) iɲ/c (その他)	ɐk (莊組) iɲ/c (その他)
曾	合口一等	((u̯)ɐŋ)	((u̯)ɐŋ)
曾	合口三等	(u̯)iɲ/c	(u̯)iɲ/c
梗	開口二等	a:ɲ/c	a:ɲ/c
梗	開口三等・開口四等	ɪ:əɲ/c	ɪ:əɲ/c
梗	合口二等	(u̯)a:ɲ/c	(u̯)a:ɲ/c
梗	合口三等・合口四等	(u̯)iɲ/c	(u̯)iɲ/c
通	合口一等	uŋ/k	uŋ/k
通	合口三等	yŋ/k (牙喉音) uŋ/k (その他)	yŋ/k (牙喉音) uŋ/k (その他)

四邑片諸方言程一見して分かるほどの異質な表面的言語特徴を呈してはいないものの、四邑片以外の粵語・桂南平話の中にも、排他性を持つと思われる方言群が複数存在する。例えば、賓陽県の桂南平話は何れも主母音の音価が流攝・臻攝の一三等の対立を保存する稀な方言群の一つであり、蔗園話などの左江・右江流域の諸方言は臻攝合口一等の*ɔn を保存しており、横県や霊山県の諸方言は莊組の宕攝開口三等が*ʊ:əŋ であることを示す手掛かりを提供している目下唯一の方言である。そして、四邑片は長介音韻母の介音要素と*ə を、それぞれ介音と主母音の形で保存している。

このように、ある種の保守性を有した方言群は四邑片に限った事ではない。ただ、系統を論ずるにあたって決定的に重要なのは、innovation であり、変化の共有である。変化の中でも、とりわけ合流、即ち対立の消失という不可逆な変化が重要な意味を持つ。四邑片の持つこの長介音韻母に纏わる特徴は保守的なものであり、従ってこれが直ちに四邑片が系統的に他の粤語・桂南平話から独立している事を無条件に保証するものではない。

粤語・桂南平話は韻母の基本的な枠組みが安定しており、一部の梧州話型粤語方言のように、外貌を大きく変えた例は稀である(拙論(2012a; 2012b))。粤語・桂南平話に見られる顕著な合流現象には、流攝・臻攝の各一三等の合流、主母音*ɔ の*a への合流、梗攝開口二等・江攝開口二等・宕攝開口一等・宕攝開口三等の合流、臻攝合口一等*ɔn の山攝合口一等乃至臻攝合口三等への合流などが挙げられる。

しかし、McCoy(1966)や詹伯慧(2002: 142-145)、湯翠蘭(1997)で示されるデータからも分かるように、粤語四邑片の中でも流攝開口一三等の合流が発生している方言と発生していない方言が存在しており、また、粤語四邑片では效攝・咸攝に於いて主母音*ɔ が*a へ合流する方言が観察されるが、地点によっては一方の攝のみでしか合流が起きなかったり、どちらも合流が起きなかったりする[8]。梗攝開口二等・江攝開口二等・宕攝開口一等・宕攝開口三等の合流については、どの方言も共通して江攝開口二等と宕攝開口一等が合流しているが、流攝・臻攝の各一三等の合流、及び主母音*ɔ の*a への合流という音変化は、どちらも粤語四邑片の系統的単一性を脅かし得るものである。しかし、四邑片に特有のものとしては、臻攝合口一等が一律に臻攝合口三等と合流している現象を挙げる事が出来る。

粤語四邑片はその他の粤語・桂南平話とは様態が大きく異なっている。しかし、その異質性はある種の保守的性質によるものであり、必ずしも固有の革新的特徴を数多く有している訳ではない事が分かる。

もとより韻母は音韻体系の一部分に過ぎず、韻母だけを見て最も妥当な系統樹を描いたとしても系統論の議論に決着をつける事は出来ない。一見特異な存在である粤語四邑片が系統上如何に位置づけられるのかについては、声母や声調も含めた音韻体系全体を分析して初めて答えが出される。

今暫定的に「粤語四邑片」と呼ばれる諸方言が系統上閉じたグループを成している、即ち単系統群を成していると仮定すると、流攝・臻攝の各一三等の合流や、主母音*ɔ の*a への合流は、粤語・桂南平話の諸方言を最初に二分する変化としては見做せなくなる。

宕攝開口一等・江攝開口二等の合流は、上記の合流の中で最も起こりやすい変化であると考えられる。韻尾*-ŋ/k は奥舌で調音される子音であり、江攝開口二等*aŋ/k の主母音*a は奥舌化しやすい環境にあるといえる。宕攝開口一等・江攝開口二等の合流は、非相同的(homoplastic)に発生する(即ち、系統上互いに無関係に個別に合流が発生する)可能性が最も高いと考えられ、

[8] 広州方言を例にとれば分かるように、抑も效攝も咸攝も、韻尾が円唇性を有するという点で蟹攝や山攝、宕攝とは条件が異なる。四邑片に於ける*ɔ の音変化を、桂南平話に見られるものと完全に同等に扱う事は難しいかもしれない。

この事は、粤語・桂南平話を系統上大きく二分する変化として見做さない十分な根拠たり得る。

また、宕攝開口三等・梗攝開口二等の合流は、他の先行研究で報告される賓陽県の諸方言とは異なり、李连进(2000)の賓陽方言でも観察されるが、他の先行研究で報告される賓陽県の諸方言と李连进(2000)の賓陽方言とは類似しており、両者の本質的な差異は、ほぼ宕攝開口三等・梗攝開口二等の合流の有無にしかないと考えられる。表面上の類似性は系統を論ずる際の手掛かりには本来なりにくいが、李连进(2000)の賓陽方言もその他の先行研究の賓陽方言も、地理的に極めて近接しており、これらの方言が緊密な系統関係で結ばれている可能性が高い。また、宕攝開口三等*ɪːəŋ と梗攝開口二等*aɲ は、それぞれ介音と韻尾に前舌性を有しており、宕攝開口一等と江攝開口二等程でないにしても、互いに合流を起こしやすいと韻母同士であると考えられる。

このように考えると、粤語・桂南平話を二分し得る音変化の候補として、江攝開口二等・梗攝開口二等の合流、非牙喉音声母の臻攝合口一等*ɔn の山攝合口一等への合流、非牙喉音声母の臻攝合口一等*ɔn の臻攝合口三等への合流、の三つが残る。

一つ目の仮説として、江攝開口二等・梗攝開口二等の合流によって、系統が先ず二分されると考えるならば、貴港市・霊山県・横県・浦北県の諸方言がそれ以外の方言から最初に分岐した事になる。そして、霊山県・横県での宕攝開口一等・江攝開口二等の合流(即ち、宕攝開口一等・江攝開口二等・梗攝開口二等の合流)は、多くの諸方言で起こった宕攝開口一等・江攝開口二等の合流と、互いに非相同的な関係にある事になる。また、貴港市・霊山県・横県・浦北県の諸方言で起こった臻攝合口一等*ɔn の山攝合口一等への合流と、その他多くの方言で起こった臻攝合口一等*ɔn の山攝合口一等への合流も、互いに非相同的な関係にある事になる。

また、非牙喉音声母の臻攝合口一等*ɔn の臻攝合口三等への合流を以て最初の分岐が起こったとするならば、粤語四邑片がそれ以外の諸方言から最初に分岐した事になる。そして、粤語四邑片に於ける宕攝開口一等・江攝開口二等の合流は、多くの諸方言に於ける宕攝開口一等・江攝開口二等の合流と互いに非相同的関係にある事になる。

非牙喉音声母の臻攝合口一等*ɔn の山攝合口一等への合流が最初の分岐であるとするならば、蔗園話などの桂南平話・粤語四邑片以外の諸方言が最初に分岐した事になる。この時、蔗園話などに於ける梗攝開口二等・宕攝開口三等の合流と賓陽県(李连进(2000))や玉林市に於ける梗攝開口二等・宕攝開口三等の合流、及び、粤語四邑片や蔗園話などに於ける宕攝開口一等・江攝開口二等の合流と多くの方言に於ける宕攝開口一等・江攝開口二等の合流は、やはり互いに非相同的関係にある事になる。

非相同的な音変化が少ない仮説や、複数方言間で互いに無関係に発生する可能性が高い音変化を非相同的なものとして扱う仮説が妥当である事になるが、これに従えば、この三つのうち二番目の、非牙喉音声母の臻攝合口一等*ɔn の臻攝合口三等への合流を最初の分岐と捉え、粤語四邑片とそれ以外とが分岐したと考える仮説が最も妥当であるとされる。

即ち、粤語四邑片が単系統群を成しているという仮定が成り立つ限りに於いて、四邑片は他の粤語・桂南平話から最も早く分岐した方言であると見做す事が出来るのである。

4．結論

韻母のみに注目して粵語・桂南平話全体の諸方言の系統を論じ尽くす事は出来ないが、目下本稿の扱う限りに於いては、粵語四邑片が単系統群であるという仮定に基づくならば、粵語・桂南平話全体から最も早くに分岐した方言は粵語四邑片であると考えるのが、目下妥当である。この結論が、粵語四邑片の持つ表面的な異質性に基づくものではない事は言を俟たない。

分類と系統の議論は本来必ずしも一致するとは限らないものであり、「粵語」「桂南平話」という分類は、方言間の系統関係に基づいて設けられたのではない。方言分類の枠組みを所与のものと見做しては、系統の議論に決着をつける事は難しい。

本稿はあくまでも韻母に議論を限定したものであり、本稿では取り扱わなかった他の華南の漢語諸方言も比較対象とした上で、韻母のみならず声母や声調について再建を行う事が、華南の言語史を解明するにあたっては必要である。稿を改めて更に分析を深化させたい。

参考文献

英文

Li, Fang Kuei (1977) *A Handbook of Comparative Tai*. Honolulu: Unievrsity press of Hawaii.

McCoy, John (1966) *Szeyap Data for a First Approximation of Proto-Cantonese*. Cornell University dissertation, Ithaca.

Pittayaporn, Pittayawat (2009) *The Phonology of Proto-Tai*. Cornell University dissertation.

Tsuji, Nobuhisa (1980) *Comparative Phonology of Guangxi Yue Dialects*. Tokyo: Kazama Shobo.

中文

陈小燕(2007) ≪多族群语言的接触与交融——贺州本地话研究≫ 北京: 民族出版社.

——. (2009) 广西贺州八步(桂岭)本地话音系 ≪方言≫ 1: 53-71.

陈海伦; 林亦(2009) ≪粤语平话土话方音字汇 第一编: 广西粤语、桂南平话部分≫ 上海: 上海教育出版社.

甘于恩(2003) 四邑话: 一种粤华的混合方言 ≪中国社会语言学≫1: 95-100.

黄海瑶(2008) 广西横县百合平话音系 ≪桂林师范高等专科学校学报≫ 22, 2: 15-24.

黄群(2006) 贺州市贺街本地话同音字汇 ≪桂林师范高等专科学校学报≫ 20, 3: 5-13.

黄英富(2007) 宾阳县大桥平话同音字汇 ≪桂林师范高等专科学校学报≫ 21, 2: 1-11.

黄昭艳(2006) 灵山黄州话同音字汇 ≪桂林师范高等专科学校学报≫ 20, 3: 14-20.

李连进(2000) ≪平话音韵研究≫ 南宁: 广西人民出版社.

李连进(2002) 壮语老借词、汉越语和平话的历史源流关系 ≪广西师院学报（哲学社会科学版）≫ 23, 4: 87-91, 100.

李连进; 朱艳娥(2009) ≪广西崇左江州蔗园话比较研究≫ 桂林: 广西师范大学出版社.

梁伟华(2007) 崇左新和蔗园话音系特点 ≪南宁师范高等专科学校学报≫ 24, 1: 101-104.

梁伟华; 林亦(2009) ≪广西崇左新和蔗园话研究≫ 桂林: 广西师范大学出版社.
梁忠东(2010) ≪玉林话研究≫ 成都: 西南交通大学出版社.
麦耘(2008) 广西八步鹅塘"八都话"音系 ≪方言≫1: 18-33.
平田昌司; 溝口正人; 赵日新; 刘丹青; 冯爱珍; 木津祐子(1998) ≪徽州方言研究≫东京: 好文出版.
覃世贞(2007) 田东蔗园话语音系统 ≪桂林师范高等专科学校学报≫ 21, 1: 1-7.
覃远雄(2001) 桂南平话的主元音及韵母格局 ≪方言≫2: 119-132.
覃远雄(2011) 桂南平话古果假两摄字的今读音 ≪方言≫1: 26-36.
覃远雄(2012) 桂南平话古遇摄字的今读 ≪方言≫4: 293-301.
湯翠蘭(1997) 四邑方言聲韻初探, 碩士論文, 國立台灣大學.
韦庆稳; 覃国生(1980) ≪壮语简志≫ 北京: 民族出版社.
谢建猷(2007) ≪广西汉语方言研究≫ 桂林: 广西人民出版社.
詹伯慧; 張日昇(1990) ≪珠江三角洲方言綜述≫ 香港: 新世紀出版社.
詹伯慧; 張日昇(1998) ≪粵西十縣市粵方言調查報告≫ 廣州: 暨南大學出版社.
詹伯慧(2002) ≪广东粵方言概要≫ 广州: 暨南大学出版社.
张均如; 梁敏; 欧阳觉亚; 郑贻青; 李旭练; 谢建猷(1999) ≪壮语方言研究≫ 成都: 四川民族出版社.

和文

遠藤光暁(1986)「粵語咸攝一等牙喉音の主母音について」『開篇』2.; 遠藤光暁(2001)『漢語方言論考』東京: 好文出版. 137-148.
濱田武志(2012a)「湖南省江華瑤族自治県の梧州話の粵語に於ける系統論的位置付け」修士論文, 東京大学.
濱田武志(2012b)「湘・粵・桂の省境地域の粵語「梧州話型粵語方言」について」『開篇』31: 158-174.
平山久雄(1967)「中古漢語の音韻」『中国文化叢書 1 言語』東京: 大修館書店. 112-166.
三根谷徹(1993)「越南漢字音の研究」『中古漢語と越南漢字音』東京: 汲古書院. 213-535; 三根谷徹(1972)『越南漢字音の研究』東京: 東洋文庫.

粤语及桂南平话的共同原始语言的韵母

滨田武志

关键词: 粤语　桂南平话　系统发生关系　构拟　韵母

要旨

粤语及桂南平话的共通原始语言的韵母，有介音的音长比韵腹还长的韵母——“长介音韵母”，和硬腭辅音韵尾-ɲ/c。另外，通过原始语言的构拟我们发现，在系统发生关系上粤语四邑片有可能与其他粤语及桂南平话的关系比较远。

Rhyme in the Proto-language of Yue and Guinan Pinghua Dialects

HAMADA Takeshi

Keywords: Yue dialects, Guinan Pinghua (Pinghua dialects in southern Guangxi), genetic relationship, reconstruction, rhyme

Abstract

Rhyme in the proto-language of the Yue and Guinan Pinghua dialects has “long-medialed rhymes,” in which the medial is pronounced longer than the nucleus and the palatal coda -ɲ/c. Through the reconstruction of the proto-language, we realized that it is very likely that the Siyi dialect, one of the Yue subdialects, is genetically distant from the other Yue and Guinan Pinghua dialects.

(はまだ・たけし　東京大学大学院博士課程)